

## 母子画に関する理論的検討

西田江里\*・松下姫歌\*

### The theoretical examination of Mother and Child Drawings

Eri Nishida\*, Himeka Matsushita\*

The purpose of this study was to examine the theoretical backgrounds of mother and child drawings from the point of view of development, internal working model (IWM), and separation-individuation theory. What is projected onto mother and child drawings is examined by organizing basic study on these drawings and some studies using these drawings, and findings from this examination are sorted out and observations are reported.

Key words : Mother and Child Drawings, object-relations theory

#### 問題と目的

##### 母子画とは

母子画 (Mother and Child Drawings) とは, Gillespie (1994 松下・石川訳, 2001) が考案した投影法であり, “Draw a mother and child” という教示のもと, 母子像を描いてもらう描画法である。具体的な方法については, Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は教示しか示していない。この点について, 馬場 (2005) は具体的な手続きとして, 3B の鉛筆と横向きにした A4 版の白紙 (210×297mm) を渡し, 「お母さんと子どもの絵を描いて下さい」と教示するとし, 質問された場合には, 通常の投影法と同様に, 何かを暗示するようなことは極力避けて, お母さんと子どもを描くという点以外は, 用紙の向きも含めて「思った通り, 自由に描かせる」。また, 馬場は, 描画後に, 母子画にどのような心的世界が投射されているのか, 被検者自身は自分の描いた母子画をどのようにとらえているのかを把握するために, ①子どもの性別, ②年齢, ③母親の年齢, ④親子は何をしているか, ⑤子供は何を考えているのか, ⑥母親は何を考えているのか, ⑦母親と子どものどちらに親しみを感じるか, といった質問項目を設定している。

このような母子画の手続きにおいて, 母子画の目的に重要なかわりをもつ教示の問題がある。

Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の教示は, “a mother and child” という, ひとつの母子ユニットとしての“母-子”像を描かせるものである。Gillespie 自身, 「この教示が要求しているのは, あなたの母

\* 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate school of Education, Hiroshima University)

親でも、ある母親とその子どもでも、ある母親とある子どもでもないことに注意されたい」と述べ、「母子」は母子関係の個性や特殊性を含みつつも、西洋文化の歴史において「母子」は単位 unit として扱われ、抽象的な概念としての地位をも含んでいると指摘している。一方、馬場による日本語版の場合も、「お母さんと子ども」という、その個性や普遍性を問わない形での教示を採用している。この点に関し、馬場 (2005) は、描かれた母子像に見られる子ども像の人数と、描いた人の実際のきょうだいの人数の関連について調査し、きょうだいの人数にかかわらず、95%以上が子どもが単数の母子像を描くことを明らかにし、「子ども像が現実のきょうだい数を反映するのではなく、母親1人と子ども1人の二者関係の描画が母子画の基本的な形である」としている。つまり、文化的背景に違いがあるけれども、「お母さんと子ども」という教示刺激もまた、“a mother and child”と同じく、外的現実としての対人関係の情報よりも、描き手の内的現実としての母子ユニットのイメージを喚起し、母子画に投影されると言える。

### 母子画の理論的背景—対象関係論

このことは、母子画のもともとの理論的背景と関係がある。Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、Klein (1921 西園・牛島訳, 1983) によって展開された精神分析の流れの一つである対象関係論を、母子画の背景理論としている。

対象関係とは、一般的な意味で言う対人関係とは異なり、「外的対象」そのものの特徴・性質・行動を基にして結ばれる関係ではなく、「本能に基づく幻想」が投影された外的対象を、内的対象として取り込むことで成立する関係である。したがって、外的現実として認識される対象とは必ずしも一致しない、内的表象との関係である。つまり、それは、心的な現実として体験される表象である。例えば、最早期の乳児においては、まだ自己と他者という内的表象は生み出されていないし、自己と世界という区別も成立していない。自己の心的体験はすなわち世界体験というように、自己と世界は融合したものとして体験される。空腹など生存にかかわる不快は迫害的な世界体験となり、空腹が満たされた快は生きていけるという世界体験となる。このような分裂した世界表象が、不快な世界になっても泣けば快に転じるというような基本的には快の世界としての表象を形成するようになり、快の世界に転じる際に側にいる母親と自己とが融合した表象が、世界をつかんでいく基礎となっていく。つまり、快欲求が満たされる時はその内的表象が投影されて良い母親として体験され、満たされず不快な時は悪い母親として体験される。それらが一人の母親の両面というような統合された全体表象を形成するのはまだ先であり、良い対象と悪い対象に分裂した部分的な母親表象が抱かれる。こうした内的な良い／悪い対象をどのように体験し、それらとどのような関係をもつかを通じて、心的な次元における自己と他者の表象とその関係が少しずつ分化と統合を重ねて発展していく。つまり、心は、内的表象としての「母子」関係を基に組織化されていくと言え、それは「実際の母子関係を通じて人格が形成されるという意味ではなくて、早期の母子関係を通じて〈母子〉が心の中に内在化される」(平井, 2002) プロセスと言える。

母子画は、このような対象関係論に基づき、表現された母子像が内的世界の自己-対象関係を表象するものと捉え、母子画の表現された母子像と子ども像の関係を読み取ることにより、被検者の対

象関係を理解する(馬場, 2005)。この点については、誤解されがちであるが、例えば、母子画における母親像が、それぞれ、描き手の「実際の」母親像と自分の像を示しているという風に捉えるのではなく、あるいは、子が自己で母親が対象という風に捉えるのでもない。そうではなく、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、母子画における母と子の「両方の像が、内面化された自己と他者」と見る。母親像は、自分の母親についての認知から普遍性を帯びた母性にいたるまでを含む「内的表象」として、そのある面が投影されたものである。このことに関し Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、母性像に、「対象としての自己 (self-as-object)」、例えば、子どもの母親に同一化しそれによって自己統制をはかる能力を読み取るというようなことが可能であることを示唆している。その例として、もし、敵意に満ちた母親と活気のない子どもを描いた場合、対人関係の反映と見て、実際に母親が敵意を表に出す人で子どもは大人しい、と決めつけてかかるわけにはいかないとしている。少なくとも子どもの内的世界においては母親がそのように見えているということはあるかもしれない。そう見えるとしたら、そのように投影される内的表象はどのようなものであると考えられるのであろうか。母親が実際に母親であり、子どもが自分であるという風に振り分けて見るのではなく、内的対象として、自らの中に攻撃するもの-おびえるもの-の対が見いだされていると考えてみよう。自らの中の子どもの部分がおびえていて、母親の部分が攻撃的な役割を担っている、という風に見るとしたら。この点について Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、攻撃的な母親像は、内面における攻撃者との同一化を示している可能性があり、その同一化によって、自分の中の子どもの部分がおびえてしまうことに対処する力を体得しようとしている面がある、と読み取ることが可能かもしれない、としている。

### 母子画に読みとりうるもの—Gillespie の観点

このように、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、母子画における母子像は、母親像が他者で子ども像が自己像であるというようなものではなく、母親像と子ども像の関係のあり方が「内面化された自己と他者」の関係のあり方を示しうると考えている。特に、母子画に意図せず無意識のうちに使用された象徴(シンボル)、とりわけ、「二つの像の間の関係や結合の様式、もしくはは結合の欠如の強調」についての理解が重要であるとしている。

例えば、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、微笑み、アイ・コンタクト、身体接触、手を伸ばしている姿はすべて、関係の肯定的側面を描写する方法であるとひとまずは述べている。この点に関し、馬場 (2005) は母子画の身体接触とアイコンタクトは被検者の心の交流(被検者

表 1 母子画に現れる描画パターン  
(馬場, 2005 をもとに作成)

出現頻度	笑顔		身体接触	アイコンタクト	
	母	子			
多い	(1)	○	○	手をつなぐ	×
		○	○	手をつなぐ	母⇄子
	(2)	○	○	抱く	母⇄子
	(3)	○	○	抱く	母⇒子
	(4)	○	○	×	母⇄子
	(5)	○	○	×	×
		○	×	抱く	母⇒子
	(6)	○	×	抱く	×
		×	○	手をつなぐ	×
	(7)	×	×	手をつなぐ	×
		×	×	×	×
		空白の顔	空白の顔	抱く	×
	(8)	空白の顔	空白の顔	手をつなぐ	×
		空白の顔	空白の顔	×	×
少ない	(1)	○	○	手をつなぐ	子⇒母
	(2)	○	○	×	母⇒子
		×	×	×	母⇒子
(3)	○	×	×	×	

○:あり, ×:なし, 空白の顔:表情が描かれていない  
 母⇄子: アイコンタクトが母子相互にある  
 母⇒子: 母の視線が子に向けられている  
 子⇒母: 子の視線が母に向けられている

が体験してきた他者との関係スタイル) を表象したものであるという視点から、少数例を含めた 18 パターンの特徴を明らかにしている。馬場 (2005) が明らかにした描画パターンを整理し表 1 にまとめた。馬場 (2005) によると、出現頻度の最も多かった描画パターンとして〔母子がともに笑顔／手をつなぐ／アイコンタクトなし〕 (24.7%) であり、これを基本パターンとし、〔母子がともに笑顔／手をつなぐ／母口子〕 は基本パターンの亜型であるとしている。

しかし、一方で、こうした表現は、どのようなものの間でのどんな関係の持ち方なのか、どのような形でどのような方向性や意図をもつものとして描かれているかによって、意味や性質が異なってくる点についても触れている。つまり、本来は、ある母子画の中に見られる特定の特徴のみを部分的にとりあげて意味づけることはナンセンスであり、ある母子画の中に見られる個々の特徴は、その母子画全体の中でそのように描かれた必然があることを受けとめていく必要があり、描き手の中で体験されている内的対象の性質や力関係が象徴的に集約された表現として、個々の母子画のイメージを受けとめていく必要があると考えられる。

しかし、一方で、個々の母子画全体としての表現の個性にアプローチしていくためには、その中に含まれている特徴を見出し、その特徴が示しうる意味合いの幅を捉える観点を見出していく段階が必要である。このことについて、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、対象関係論的な観点から、例えば、健常な子どもから高齢者までの母子画をもとに、発達の観点から、児童期から成人期にいたる過程で、内的な対象関係は“母子一体化”から“分化”したものへと発展し、それが母子画においては、“母子が似た姿・似た大きさで、横並びかつ手が触れるような像”から“異なる姿・異なる大きさの像”への変化として現れるとしている。この点に関する Gillespie 自身による具体的な基礎的研究としては、母子像のサイズに関するものがあり、児童期から成人期にかけて、母親像が大きくなり、子ども像は小さいままで留まることを明らかにしている。この場合、「母親像は成熟した自我、子ども像は inner child を表している」という仮説を提示している。こうした、母子画に何があらわれうるのか、何を読みとりうるのかについての基礎的な研究はまだまだ着手されはじめたところである。

本研究では、現在までに提示されている母子画に関する基礎的研究をもとに、母子画に内的な対象関係を読みとる観点に関する知見について整理し、検討することを目的とする。

## Gillespie の仮説に含まれる観点に関する基礎的研究

### Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の研究

Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は、発達にしたがい、心的に母子未分化な状態から分化していく過程が、母子像のサイズにも現れる、すなわち、母子が同じサイズで描かれる段階から、母子のサイズが異なり、母親像が大きくなり子ども像が小さく描かれるようになる、という仮説を検討することと、あわせて、少年と少女が異なる発達過程をたどる仮説を検討するために、母子画の母親像と子ども像のサイズ (高さ) に注目した研究を行っている。対象者は児童群 (6-9 歳 ; 52 名) , 前思春期群 (10-12 歳 ; 43 名) , 思春期群 (15-18 歳 ; 47 名) , 成人群 (19 歳以上 ; 40 名) であり、13 歳と

14歳を除外した理由として、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は思春期初期には身体的・情緒的な発達が流動的なためであるとしている。それぞれの群の母親像と子ども像のサイズをミリ単位で測定して性差を検討し、表2に示す結果を得ている。

表2 母子像のサイズの男女別平均値 (Gillespie, 1994 をもとに作成)

		児童群		前思春期群		思春期群		成人群	
男性	母親像	<i>n</i> =24	93.75 ( <i>SD</i> =35.48)	<i>n</i> =22	64.27 ( <i>SD</i> =27.36)	<i>n</i> =23	103.13 ( <i>SD</i> =51.89)	<i>n</i> =12	133.33 ( <i>SD</i> =57.96)
	子ども像		53.96 ( <i>SD</i> =22.09)		43.00 ( <i>SD</i> =19.26)		53.26 ( <i>SD</i> =19.26)		58.41 ( <i>SD</i> =32.59)
女性	母親像	<i>n</i> =28	93.57 ( <i>SD</i> =37.92)	<i>n</i> =21	89.66 ( <i>SD</i> =23.98)	<i>n</i> =24	81.46 ( <i>SD</i> =33.05)	<i>n</i> =28	101.97 ( <i>SD</i> =48.05)
	子ども像		59.82 ( <i>SD</i> =32.98)		59.34 ( <i>SD</i> =23.66)		45.63 ( <i>SD</i> =23.66)		60.90 ( <i>SD</i> =29.72)

注：平均の高さはミリメートルで測定

男女とも、児童群と成人群では、子ども像のサイズはあまり変化しないが、母親像は大きくなっており、母親像と子ども像のサイズの違いは、成人群で大きくなっている。この点においては、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説は指示されたと言える。

ただし、児童群と成人群の間の、前思春期群と思春期群では、パターンに性差が見られる。児童群では母親像と子ども像のサイズに性差はみられなかった。前思春期群では母親像・子ども像ともに男性より女性のサイズが大きく、男子による描画サイズは児童群より両像とも急激に小さくなるが、女子が描いたサイズは児童群のサイズとほとんど変わらなかった。思春期群では、母子像のサイズが女性より男性が大きく、女子の母親像と子ども像のサイズが小さくなるのに対して、男子では児童群のサイズに近くなっている。成人群でも女性より男性の母子像のサイズが大きかった。成人群の男性が描いた母親像のサイズが一段と大きくなっているのに対し、子ども像は思春期群のサイズとあまり変わりがなく、女性では母親像・子ども像ともに少し大きくなっている。

Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は前思春期群の男子のサイズが小さいことに関して、規則や自己コントロールの学習といった行動規制が影響しているのかもしれないと述べ、思春期前期の男子の行動規制は伝統的なもので、文化的に適應していることを示すものであり、行動規制は男子により深刻な影響を与えるが、同じ年代の女子にはそれほどの影響がない、としている。

Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) はこれらの得られた結果と対象関係論の概念を関連付けて、以下のように考察している。描画における母子像のサイズが基盤にある自己概念の指標になるのではないかと推測している。また、様々な方法で母性的体験を受けた男性と女性は似ているところもあると述べ、発達途上にある年齢を通してその違いが明らかになり、群間で観察されるような描画の変化に反映されるとしている。そして、女性にとっての母親像の描画は、自己主張や自信が思春期前期の段階で欠如し二度と完全には回復しないことを示唆していると、承認による描画は、潜伏期に主張や自信を同じように失っても、それらの特質を思春期に回復して大人のものとして発達させ続けていることを示唆していると述べている。

さらに、子どもが成人するにつれ母親像が大きくなっていることについては、成熟した自我と関係の中に入っていき現実に対処する自己とを表していると考察している。

## 馬場 (2005) の研究

馬場 (2005) は、母子画についてさまざまな基礎的研究をおこなっている。そのうち、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説に基づいて以下のような分析指標を設定し検討している。すなわち、発達にともない、内的表象としての母子像は、未分化なものから分化したものへと発展するという仮説であり、それは、サイズや姿が似通ったものから、互いに異なるものへと変化するというものである。サイズの差が増大する、表情が同じものから違ってくるといような、姿に関わるものその他、特に、内的対象として母親像と子ども像の関係を読み取ることで被検者の対象関係を推測するという特徴から、母親像、子ども像、母親像と子ども像の関係性という観点で分析指標を設定している。つまり、母子像の関係性についても、未分化なものから分化したものという観点から、身体接触の度合いや、アイコンタクトのあり方をとりあげている。

ただし、この研究においては、発達による変化ではなく、成年期に近づきつつある青年期後期にあたる大学生を対象とし、この時期における基本的特徴についてのデータを得ることが目的と言える。以下に、馬場 (2005) の結果を示しつつ、再検討したい。

### ①サイズについて

人物画のサイズは一般的に被検者と環境の関係、自尊心や活動性、感情状態を反映すると考えられている。加えて、Gillespie における内的対象が母子未分化から分化へと発展するという仮説を検討するため、各像を [小さい] [普通] [大きい] に分類し、母親像と子ども像がどのサイズに属するかで、両者の一致不一致とその方向を検討している。その結果、母親像と子ども像の両像のサイズの一致率は 76.3% であり、基本は両像が一致し、例外は不一致であるとしている。そして、バランス的に母親像よりも子ども像が大きいものは例外的であるとも述べている。この結果は、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説や結果と食い違うものである。ただし、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) のようにサイズを連続量として扱わず、名義尺度に落として比較しているという情報量の違いも要因としてあげられよう。

### ②表情

人物像の表情には被検者の心情が直接的に表れやすい。また、後ろ姿の人物像、空白の顔を描く場合は、本当の姿を隠して外界との接触をする傾向や、逃避的な構えが強いとされている。Gillespie によれば母子像の表情はほとんどが笑顔であり、そうでない場合には慎重な検討に値すると述べている。一方で、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の内的表象の母子未分化から分化への発達という仮説を表情にあてはめれば、母子の表情が異なることは、内的表象の分化やアイデンティティ形成と関連することが考えられる。母子画に表現された母親像は現実の母親そのままではなく、母親との関係を通して内在化された心の中の母親像である。そのため、母親像もその人自身であり、母親像が示した表情・心情はその人の心情である。子ども像もまたその人自身であるならば、母親像と子ども像の表情が異なる場合はその意味を理解することは重要な視点である。そこで、[笑顔/非笑顔/後ろ姿/空白の顔] に分類して出現頻度を調べた。

母子画では、表現型の出現頻度には有意な偏りが見られた。母子の表情の一致においては、[母子ともに笑顔] が出現頻度 58.8% と最も多く、標準的なものと位置づけている。他の一致については、

非笑顔 12.8%, 空白 10.7%, 後ろ姿 1.8%の順であり、表情の一致はトータルで 84.1%に達した。不一致に関しては〔母親は笑顔・子どもは非笑顔〕の組み合わせが 9.1%の出現頻度であり他の組み合わせに比べて出現率が高かった。母子とも笑顔が 6 割に近く、他の表情も含めて母子一致するパターンが 8.5 割近くに達することも、①サイズの結果と共通する。ただし、母子の表情が一致する場合でもその表情は異なるし、一致しない場合もさまざまなパターンが生じている。むしろ、それぞれの詳細を検討することが必要と考えられる。

### ③身体接触について

母子像の身体接触を描くためには、母親像と子ども像を接近させて描く必要がある。被検者の心に母親像を信頼する気持ち、ひいては「他者は自分に危害を加えないだろう」という基本的信頼感が母子の身体接触に象徴される。また、身体接触の意味はどのような形で接触しているかによっても異なると考えられ、〔抱く／手をつなぐ／子からの接触／非接触〕に分類した。その結果、〔手をつなぐ〕の出現頻度が 54.9%と半数強を占め、次いで、〔抱く〕 22.8%、〔非接触〕 21.2%がほぼ同率であわせて半数弱を占め、少数ながら〔子からの接触〕が 1.1%見られた。身体接触の度合いという、では、〔手をつなぐ〕は中間態に位置づけられるが、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は横並びで手をつなぐことは共生の名残とも捉えている。一方で、同じ手をつなぐという形をとっても、それがどのような表象のどのようなつながり方なのかによっても意味が異なってくることも、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) は示唆している。心的な分化の指標を、身体接触の度合いのみでなく、質的な側面からもとらえる観点が必要である。

### ④アイコンタクトについて

Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) はアイコンタクトも肯定的コミュニケーションを表すシンボルであると述べている。対象関係論の観点から考えると、見つめ合う母子像は、成熟した母親である内的自己と自己の内なる子どもとの親密な情緒的交流や相互的な信頼感のシンボリックな表現であるといえる。アイコンタクトの有無と方向性から〔母親と子どもが見つめあっている (母⇄子) / 母親が子供を見ている (母⇒子) / 子供が母親を見ている (母⇄子) / アイコンタクトなし〕に分類した。その結果、〔アイコンタクトなし〕が 59.1%の出現率で最も多く、次いで〔母⇄子〕 21.2%、〔母⇒子〕 13.9%、〔母⇄子〕 5.8%であった。アイコンタクトなしが 6 割近くと多いのは、既に掲げた表 1 に見られるように、手をつなぐ像にはアイコンタクトがないものが多く、おそらく横並びで互いに正面を向いた形で描かれるものが多いと推測されること、手をつなぐ像は③身体接触でもっとも多く 5 割を超えていたことと関係すると思われる。表 1 に見られるように、最も多い母子像の型が、ともに笑顔で (おそらく横並びに) 手をつないでいるというものである。既に述べられたように、手をつなぐこともアイコンタクトも一般的には肯定的なコミュニケーションを表すものとして捉えられやすいが、目を合わせることでコミュニケーションと、目を合わせないが、同じ笑顔で横並びに手をつなぐというコミュニケーションの違いについての検討や、その質的な幅を捉える観点が必要であると考えられる。

以上のように、上記のような指標からは、過半数によく見られる型とその他というような分布と

なることが多い。それは、馬場 (2005) の言う標準的な反応とそれ以外として捉えることもできるが、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) がもともと母子画で見ようとしている点は、より繊細な質的な側面であり、こうした点を捉える観点の発掘が求められると言える。

このような、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説に関する基礎的研究の他、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) が本来見ようとしていると考えられる「対象関係の質」と母子画の特徴についての研究がいくつかなされはじめている。対象関係の質を捉える視点として具体的には、内的作業モデルと分離個体化理論があげられている。それぞれの視点から、これまでのところで、対象関係のどのような性質と母子画のどのような特徴との間に関係が見られているかについて以下に検討する。

### 内的作業モデルからの母子画へのアプローチ

#### 内的作業モデル

対象関係のアセスメントの観点として、馬場 (2003) は Bowlby (1973 黒田・岡田・吉田訳, 1977) の内的作業モデルからの接近を挙げている。Bowlby (1951 黒田訳, 1967) は、「乳幼児と母親との人間関係が、親密かつ継続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされるような状態が、精神衛生の根本である」と述べ、このような人間関係を欠いている状態を母性剥奪とよんだ。Bowlby はこの母性剥奪に関する研究から発展し、愛着理論として確立した。

Bowlby (1973 黒田ら訳, 1977) は、愛着形成にまつわる論として、内的作業モデルを提唱しているが、これは対象関係論をシステム理論の視点から記述し直した概念であるとしている。

内的作業モデルの仮説とは、人は乳幼児期における愛着対象との具体的な体験を通じて、愛着対象が自らの愛着欲求に対して、どれくらいの応答性と問題解決に向けての対応性をもっているかを吟味し予測するかについて、内的作業モデルを形成するというものであり、そのモデルがその後の出来事の知覚、未来の予測、行動の決定についてとらえる大きな枠組みとして機能するというものである。内的作業モデルの実証的研究は、Ainsworth, Blehar, Waters (1987) の乳幼児の行動を対象とした研究により発展した。Ainsworth 他 (1987) は愛着パターンを分類しており、愛着対象から適切で一貫した応答のある養育を受け、安定した愛着を形成するタイプ (secure type)、愛着対象から無視や拒否を受けた結果、愛着対象の存在を回避するような不安定な愛着を形成するタイプ (avoidant type)、拒否はされなくても一貫性のない関わりを受けた結果、過度な愛着行動や探索行動に移行できない不安定な愛着を形成するタイプ (ambivalent type) に分けている。

#### 内的作業モデルと母子画にみられる特徴

馬場 (2003) は、「母子画には個人の対象関係が投影される」という Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説を検証するため、対象関係の測定法として成人版愛着スタイル尺度 (詫摩・戸田, 1988) を用いて大学生 338 名を対象に個人の内的作業モデルを測定し、それが母子画にどのように表現されるのかを検討している。



母子画についての分析項目(表3)としては、「母子像の種類」、「子ども像の数」の他、Gillespie(1994 松下訳, 2001)が対象関係の分化に応じて、母子像が似たものから異なるものへと変化するという点について検討するために、「母親像のサイズ」、「子ども像のサイズ」、「子ども像の性別」、また、対象関係の様式について検討するために、「母親像の思考」、「子ども像の思考」、「身体接触」、「接触の様式」、「交流」の10項目をあげて分析している。これらの分析に用いるため、描画後、子どもの性別と母親・子どもがそれぞれ何を考えているのかを自由記述で聞いている。

表3 母子画の項目分析(馬場, 2005)

分析項目	評価
母子像の種類	[人間] [動物・抽象的表現]
子どもの像の数	[単数] [複数]
母子像のサイズ	実測値(単位:mm)
子ども像のサイズ	実測値(単位:mm)
子ども像の性別	[同性] [異性]
母親像の思考	[子どものこと] [その他]
子ども像の思考	[母親のこと] [その他]
身体接触	[あり] [なし]
→接触の様式	[手をつなぐ] [抱く] [その他]
交流	[あり] [なし]

成人版愛着スタイル尺度とは、Hazan&Shaver(1987)がAinsworthら(1978)の愛着パターンを応用して大人の内的作業モデルを調査する質問紙を作成したものを、詫摩と戸田(1988)が改良したものである。馬場(2003)の研究でも、成人版愛着尺度を因子分析した結果、詫問と戸田(1988)の研究に対応した3因子、①anxious/ambivalent 因子：自他へ不信の強さを表す因子、②secure 尺度：他者との相互依存性や親和的關係に関する因子、③avoidant 因子：他者を回避する傾向の強さに関する因子、が得られている。

馬場(2003)は、成人版愛着スタイル尺度の3つの因子それぞれについて、高群と低群の間で母子画分析の10項目を比較している。

この分析方法ではそれぞれの群の低群と高群でどのような違いがあるかを明らかにするもので、それぞれの群間でどのような違いがあるかは明らかにはならない。

## 1) 母-子の表象の類似・相違について

### ① サイズ

男性においては、secure 高群が低群より「母親像のサイズ」が大きい。女性においては、anxious/ambivalent 高群は低群に比べ「子ども像のサイズ」と「母親像のサイズ」が小さい。

馬場(2003)は、高橋・高橋(1991)が人物画のサイズについて「通常、被検者と環境との関係を表し、①自尊心、②自己拡大の欲求、③活動性、④感情状態を示す」と述べていることから、同様の解釈が母子画の「子ども像のサイズ」と「母親像のサイズ」にも適用できるとしている。

### ② 性別

女性においては、secure 高群は低群に比べ女の子像を描くことが多い。馬場(2003)は、愛着対象からの適切で一貫した応答は、自分が愛着対象から愛され、援助される価値のある存在であるという表象を形成するとし、安定した養育環境の中で、女性としての自分が受け入れられたという内的イメージが、子ども像を女の子像として描くという形で表現されたのかもしれないとしている。

## 2) 関係様式について

### ① secure

男性においては、secure 高群は低群に比べて、「交流」特に母子のアイコンタクトが描かれることが多い。「子どもの思考」で母親のことを考えているイメージが多く、内容も肯定的なものが多い。

また、女性の場合は、高群が低群に比べ「身体接触」を描くことが多い。

馬場 (2003) は、secure 得点の高い人は、愛着対象からの適切で一貫した応答のある養育を受けた結果、他者との心地よい親和的関係を期待する内的作業モデルが形成され、自己や他者との関係について信頼感のある安定した表象が内在化していると推測し、そのような愛着対象への親和性が「子ども像の思考」や「交流」、「身体接触」という形で反映されたと考察している。

## ② avoidant

女性においては、avoidant 高群は低群に比べ、「母親像の思考」で子ども像以外のことを考えているとみなす人が多い。馬場 (2003) は、他者を回避する傾向は、愛着対象から無視や拒否をされる体験に基づくものと推測し、このような体験は子どもに「愛着対象は自分に関心が無い」という内的作業モデルを形成すると考え、そのことが母子画の「母親像の思考」に投影されたと考えている。

これらの結果から、男性の場合は、愛着スタイルの secure 度が高いと、「母親像」のサイズが大きく、母-子像の関係のあり方としては、「子ども像」は母親に肯定的なイメージを向け、「アイコンタクト」が多い。女性の場合は、secure 度が高いと「子どもの性別」は女の子像が多く、母子像の関係のあり方としては、「身体接触」が多く、anxious/ambivalent 度が高いと、母子像のサイズが小さく、avoidant 度が高いと、子ども以外のことを考えている母親像が多いといえる。

これらの結果について、馬場 (2003) は、対象関係における愛着スタイルの性質が母子画に投影される可能性が示唆されるとしているが、同じ内的作業モデルでも、被検者の性別によって関連した項目が異なっていたことから、母子画には最早期の母子相互作用のなかで培われた対象関係の核のような部分と、それを基礎としながらその後の体験や発達段階の影響を受けながら形成される部分の両方が投影されるのではないかと述べている。

男性は secure 群でしか特徴が見られず、女性にはすべての愛着スタイルで特徴が見られたことや、同じ secure 群でも、男性と女性で表現のあり方が異なることから、男性と女性では受けた母性的体験が異なるところがあり、それがこのような結果として現れたのではないかと考えられる。またそれは、男女では異なる発達過程をたどるといふ Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の説とも一致している。

また、この研究では secure, anxious/ambivalent, avoidant 因子の中で対象者を高群と低群に分け母子画項目分析との関連を見ている。しかし、完全に受け身的な依存段階での環境からの共有の失敗した場合とそうでない場合で、母子画にどのような違いが表われるのかが明らかになったとは言えない。被検者を secure type と avoidant type と ambivalent type に分け、母子画項目分析比較するとどのような違いが表われるのだろうか。それぞれの type の母子画項目得点を比較することで、それぞれに特徴的な描画パターンが見出される可能性がある。

## 分離個体化理論からの母子画へのアプローチ

### 分離-個体化理論

対象関係をアセスメントするもう一つの観点として、分離-個体化理論 (Mahler, Pine, Bergman, 1975

高橋・小田・浜訳, 1981) があげられる。Mahlerら (1975 高橋他訳, 1981) は、新生児が母親との共生状態から、いかにして自己と他者を区別していくのか、その精神内界における自己像と対象像の分化と発達を、乳幼児と主に生物的環境に代表される母親の相互的なかわりの中からとらえようとして、分離—個体化理論を提唱した。分離—個体化過程は、乳児の内界において自他の区別が始まり、やがて情緒的にも安定した他者像 (主に母親) が内在化されるまでの期間である。この過程においては、分離と個体化の2側面が相補的に機能し合っている。Mahlerら (1975 高橋他訳, 1981) は分離を「母親ひいては世界から分離しているという感覚の内的獲得」と考え、個体化を「乳幼児の様々な自立的能力の発達」ととらえている。多くの場合、この2側面には時間的ずれがあり、このことが様々な葛藤を生みだしていくと考えられている。塩崎 (2004) は、母子の分離が子どもの発達によって重要な過程であるだけでなく、その過程は母親にとっても子どもとの分離過程であり、そこで生じる心理的变化は、母親自身の成人期の発達課題を超えていく上で大きな影響を及ぼすものであるとしている。

#### 母子分離場面のイメージと母子画に見られる特徴

塩崎 (2004) は保育者の母子分離観の保育に与える影響に関する研究の中で、保育士 33 名を対象に、母子分離場面のイメージと母子画の特徴との関連について、探索的な研究をおこなっている。塩崎は、分離個体化理論にヒントを得て、母子像の母子一体状態から分離状態にいたる様態を次の3つに分類している。

- ①《母子一体》タイプ：母子との距離が密接で子どもが母親の体内に入っているものなどを含む。
- ②《スキンシップ・見つめ合い》：スキンシップを取ったり見つめ合ったりしていて、平行よりは母子の距離に近いが母子一体よりはやや距離を保っているという特徴がある。
- ③《並行関係》タイプ：3 タイプの中で最も分離している母子イメージを持っており、子どもに自分の足で立っていることが条件で、並んで歩いている絵が最も多く、手をつないでいるもの・離れて一緒に遊んでいるものも含まれる。

塩崎 (2004) はこれらの母子画のタイプと母子分離場面のイメージとの関連を見ている (表 4)。ここでの母子分離場面のイメージとは、保育における母子分離場面をイメージしてもらい、母親の気持ち、子どもの気持ち、保育者としての自分の気持ちと対応について記述したもの (以下、母子分離イメージ) である。

表 4 母子画のタイプと母子分離イメージの関連 (塩崎, 2004)

母子画のタイプ	母親の気持ち			子どもの気持ち			保育者自身		
	不安・心配	不安から切り替え	その他	悲しみ・寂しさ	混合	その他	共感→切り替え	共感	とまどい
母子画一体	6 (50%)	6 (50%)	0	11 (92%)	0	1 (9%)	2 (17%)	7 (58%)	3 (25%)
スキンシップ・見つめ合い	5 (71%)	2 (29%)	0	5 (71%)	1 (14%)	1 (14%)	1 (14%)	6 (86%)	0
並行関係	9 (64%)	4 (29%)	1 (7%)	14 (100%)	0	0	3 (21%)	9 (64%)	2 (14%)

母子分離場面における「子どもの気持ち」については、母子画のタイプに関わらず、ほとんどの

被検者が「悲しみ・寂しさ」をイメージしていた。母子画のタイプによって違いが見られたのは「母親の気持ち」についてであり、《スキンシップ・見つめ合い》群と《平行関係》群は、「不安・心配」が6割・7割以上と多いが、《母子一体》群は、「不安・心配」と「不安から切り替え」が50%ずつで、「かわいそうだが、仕事があるから頑張ろう」といった、子どもへの罪悪感から仕事へと気持ちを切り替えるイメージが多く見られた。

塩崎(1994)は、まず、母子画の接触状態の特徴から、《母子一体》群には、「母子の関わりを重視し、子どもにとっての母親の意味が大きいと考える」傾向を、《スキンシップ・見つめ合い》群は、「適度に距離を置きつつも、子どもとの触れあいを重視する」傾向を読み取り「子どもとの関係では、子どもの意志や感情を子ども自身のものとして認めつつ関わりが持てるのではないかと推測している。《並行関係》群については、「子どもとの関係は集団や環境との関わりの中で、より広い視点から捉えられて」おり、「手をつないでいる場合には、適度なスキンシップをとりつつも、個々の子どもの気持ちや個性よりも、一緒に何かをしたり、集団として同じ目標を持つという関係に重きが置かれているのではないかと考察している。

このような描画の特徴と、上述したような、母親や子どもの気持ちのイメージを照らした結果から、塩崎は、《母子一体》群は、母親の気持ちについて否定的イメージに留まらずに切り替えて進むことができるという点から、「発達的に母子一体を求めている段階にとどまっているということではなく、むしろ適度に分離するだけの十分な一体感を原点に持っているために、一体化にこだわりが持てるといえる」と解釈している。一方、《スキンシップ・見つめ合い》群や《平行関係》群に「母親の気持ち」に不安や心配などのイメージが多いことについては、特に、描画特徴とのすり合わせによる検討は特に述べられていない。ただし、「母子画にはより深いレベルの、あるいは発達的に早期の対象イメージが反映され、言語による母子分離場面の感情表現には、意識的で現実の生活に近い感覚が反映される」という推測が示されている。塩崎の研究は、母子画における母子の結びつきについての表現のあり方と、内的表象の性質とが関連する可能性の一端が示された探索的試みとして興味深いものであり、さらにデータを増やして、数量的にも質的な面についても検討していく意義がある。

#### まとめと今後の発展

本稿では、母子画の基礎的研究をとりあげて、特に、母子画に何があらわれうるのか、何を読み取りうるのかという点に絞って知見を整理し、検討した。母子画についての基礎的研究はまだ歴史が浅く、提唱者の Gillespie(1994 松下ら訳, 2001)を除いては、現在のところ、国内に数件の研究が見られる以外には、寡聞にして知らない。まだまだデータが少ないため、今回の検討でも、研究によって結果が一致を見なかったり、推計学的な検討が不十分にならざるをえず、まとまった知見が成立するまでには至っていない。しかし、このような研究途上にあつて、現在著されている研究を探索的なものも含めて検討し、何がどこまで扱われ、知見の一致不一致がどこにどのようなものか、今後なすべき検討について整理し提示できたことは、現時点での一つの成果と言えるのでは

ないかと思われる。

たとえば、母子像のサイズの面でも、Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) のデータと馬場 (2005) のデータでは結果の意味するところが異なり、成人期を前にした青年期後期を対象とした馬場の結果においては、母子の両像が一致するのが基本で、例外は不一致であるとする結果が示されている。しかし、児童期から成人期にいたる過程で、内的な対象関係は“母子一体化”から“分化”したものへと発展し、それが母子画においては、“母子が似た姿・似た大きさで、横並びかつ手が触れるような像”から“異なる姿・異なる大きさの像”，特に、母親が大きく子どもが小さい像への変化として現れるという Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説とは異なってくる。また、母子画にどのような対象関係の性質が表現されるかという点についても、馬場 (2003) の研究では内的作業モデルのそれぞれの type では、母子画にどのような違いが反映されるのかという点は明らかにされていない。同じく分離-個体化理論の観点から検討しようとする塩崎の試みも、限られたデータでの検討である。いずれも、今後、データを増やしての検討が求められる。

しかし、特に、対象関係の性質を、母子画における母子の関係の描かれ方に読み取ろうとする、上述の馬場 (2003) や塩崎 (2004) の研究には、探索的段階でありながらも、今後検討に値すると感じさせるだけの可能性が感じられる。Gillespie (1994 松下ら訳, 2001) の仮説をもとに、両者とも、母子表象の関係性を、未分化なものから分化したものへの発達を捉えようとしている点では共通しているが、描画表現のカテゴリの観点は少しずつ異なる。例えば、馬場 (2003) は《身体接触》を抱く・手をつなぐ・非接触の三段階にわけ、これとは別に、《アイコンタクト》は相互・母から子・子から母・なしの四段階にわけている。これに対して、塩崎 (2004) は、いわば、馬場における《身体接触》と《アイコンタクト》の二つの観点を総合した母子像として、母子一体、スキンシップ・見つめ合い、平行関係の三段階にわけている。

馬場 (2003) の結果と塩崎 (2004) の結果を照らし合わせて考えると、馬場 (2003) では女性において secure 度が高いと母子像の関係のあり方として「身体接触」が多く、男性においては「アイコンタクト」が多かった。これらのカテゴリは、塩崎 (2004) の《母子一体》群・《スキンシップ・見つめ合い》群・《平行関係》群のうちの「手をつなぐ」というほとんどのカテゴリと関連がある。これらはすべて、母子間に何らかの接触や交流の表現が見られるという点で共通しており、馬場 (2003) も塩崎 (2004) も、これらそれぞれについて、自己や他者との関係について信頼感のある安定した表象が内在化しているために、愛着対象への親和性として「身体接触」や「アイコンタクト」が描かれるとしている。

しかし、それだけでは、なぜそれが、「身体接触」という形で描かれたり、「アイコンタクト」という形で描かれたりするのかわかるのか、あるいは同じ身体接触でも、抱っこという形をとったり、手をつなぐという形をとったりするのかわかるのか、という点については説明されない。むしろ、例えば質問紙で測られる態度では同じ secure 型でも、描かれる母子の「関係のあり方」が異なるところにこそ、対象関係の質の違いが表現されていると考えられる。この点については、馬場 (2003) の結果においても、塩崎 (2004) の結果においても、母子画における母子像の関係性がどのように描かれるかに、対象関係の性質の違いが見いだせる可能性の萌芽が見られるため、今後、データを増やし、より詳細な

検討をおこなう価値があると考えられる。

その他、母子画と関連する既存の描画法、例えば、人物画や家族画、動的家族画などにおける、読み取りの観点に関する知見と照らし合わせて、母子画との共通点や相違点を検討することで、母子画の特徴を明確にしていくことが課題として挙げられる。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 馬場史津 (2003). 母子画の基礎的研究——成人版愛着スタイル尺度との関係から—— 臨床描画研究, 18, 110-124.
- 馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2; Separation*. Basic Books.
- (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論 II ; 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1951). *Maternal Care and Organization*, WHO, Monograph Series No.2
- (黒田実郎 (訳) (1967). 乳幼児の精神衛生 光明社)
- Gillespie, J. (1994). *The Projective Use of Mother-and-Child Drawings A Manual for Clinicians*
- (松下恵美子・石川 元 (訳) 2001 母子画の臨床応用——対象関係論と自己心理学—— 金剛出版)
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 平井正三 (2002). 乳幼児の世界 現代のエスプリ 母子臨床再考 至文堂
- Klein, M. (1921). *Love, Guilt and Reparation and Other Works 1921-1945*
- (西園昌久・牛島定信 (訳) (1983). メラニー・クライン著作集 1 子どもの心的発達 誠信書房)
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books.
- (高橋 士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生 母子共生と個体化 黎明書房)
- 塩崎尚美 (2004). 保育者の母子分離に対する意識：母子画を用いた保育研修の内容から 相模女子大学紀要, 68A, 47-74.
- 高橋雅春・高橋依子 (1991). 人物画テスト 文教書院
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度——成人版愛着スタイル尺度作成の試み—— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16
- 戸田弘二 (1990). 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関係 北海道教育大学紀要. 第一部. C, 教育科学編 41 (1), 91-100